揚子江のほとり

《中国とその人間学》

武田泰淳

武田泰淳

揚子江のほとり

《中国とその人間学》

芳賀書店

揚子江のほとり

昭和42年6月15日初版発行　　¥790

著者　武田泰淳

発行者　芳賀章

株式会社芳賀書店

東京都千代田区神田神保町2—7

電話263—1958　振替東京42503

印刷　昭和42年6月10日

本文印刷　八光印刷

表紙・印刷　市村原色版印刷

難波製本

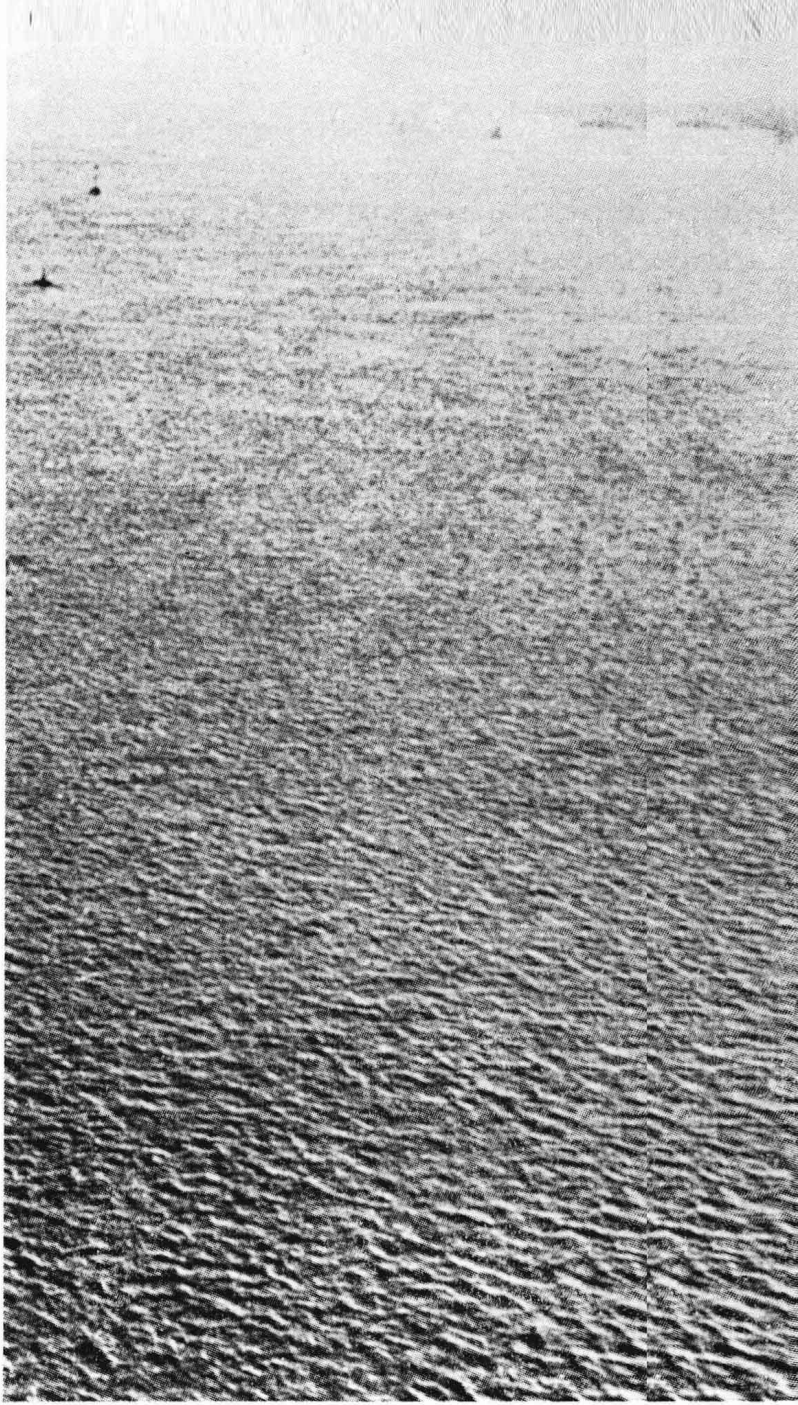
装幀　葹島庸二

企画・製作　矢牧一宏

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

揚子江のほとり

目次



I　中国で考えたこと

十六年目の中国

●菊の花・河・大地　九
●宗教人の旅　一七
●大陸の舟あそび　二〇
●中国女性の女らしさ　二四
●文人歓語の図　三四

一兵士として行った中国

●ソンをしなかった輜重兵　五五
●土民の顔　五九
●杭州の春のこと　六二
●武昌・黄鶴楼上にて男子の志をおもう　六六
●日録＝淮河・芦山・夏の武昌にて　八五
●支那文化に関する手紙　九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦後、二度目の中国
●明るく、にぎやかになった中国　一〇五
●自立更生の困難さとの闘い　一〇九
●現代中国の期待される人間像　一一五
●中ソ論争について中国側の言い分　一一九
●毛沢東の詩に寄せて　一二六

Ⅱ　中国の文学

巨大な統一と分散が生んだ大きな男たち　一三
政治悪の教科書としての三国志　一二九
曹操と赤壁の戦い　一四四
杜　甫
●草堂の杜甫　一五六

●杜甫の酒　一八二
美しき古書―古典評価のアフォリズム　一九〇
淫女プラス豪傑（水滸伝）と
淫女プラス淫男（金瓶梅）の世界　一九二
唐代伝奇小説の美事な技術　二〇四
明代のロマン派・袁中郎　二〇九
明末の悪魔王・張献忠の殺人精神　二二
紅楼夢をめぐって
●賈宝玉と『戦争と平和』のピエール　二二二
●紅楼夢をめぐる古典再評価　二二九
影を売った男・魯迅
●魯迅における政治と文学　二四二
●魯迅のロマンチシズム　二四七

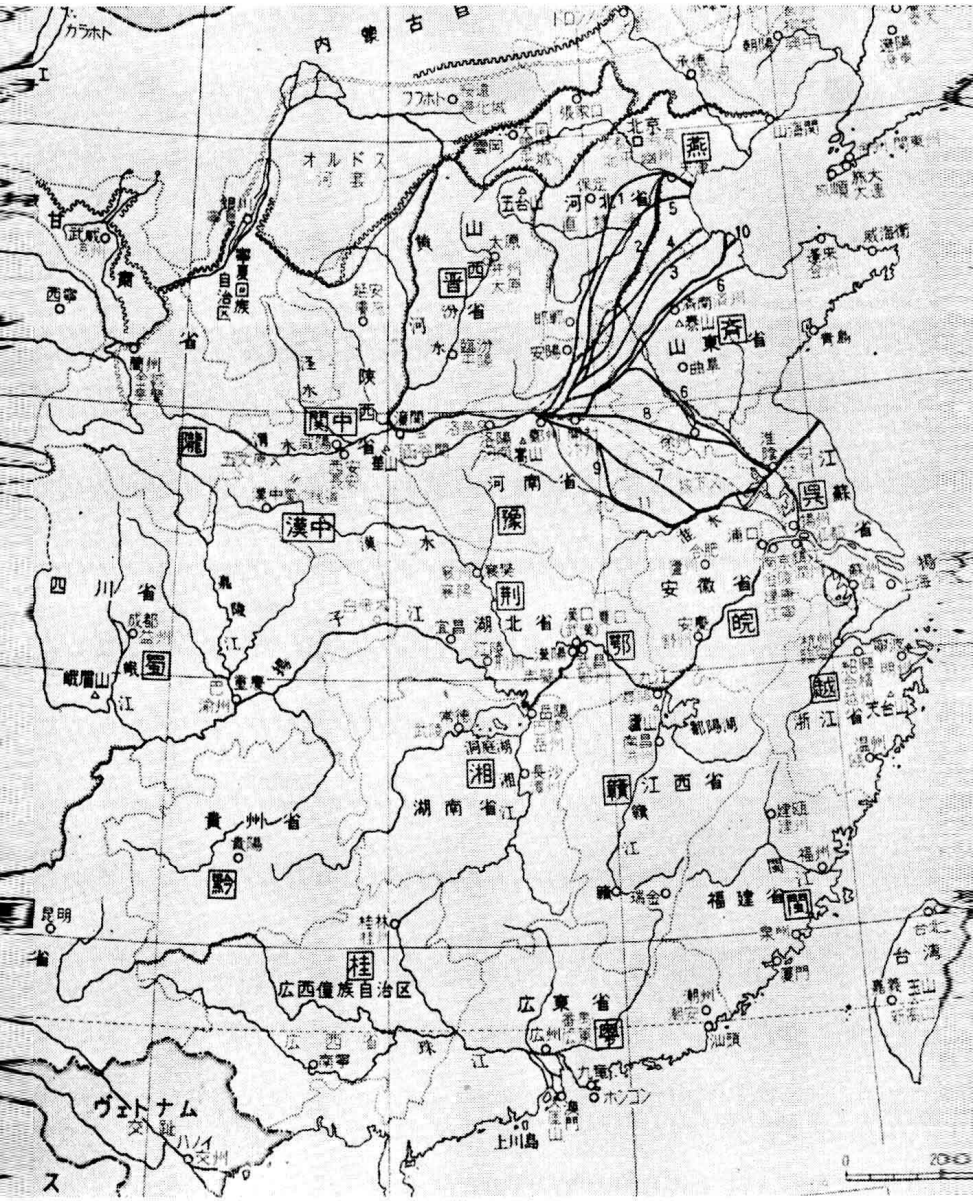
●弟・周作人と魯迅　二六〇
若き兵士の旅―沈従文『自伝』より　二七四
日中戦争前夜の中国文学
●ユーモア雑誌『論語』について　二八六
●昭和十一年における中国文壇の展望　二九二
●抗日作家とその作品　三〇六
●周作人と日本文芸　三二四
●詩人たち―生活派の臧克家と知性派の卞子琳　三三〇
内戦下の中国文学の命運　三三四
老舎における〈事実〉と〈幽默（ユーモア）〉　三四三
老舎と語る＝描ききれぬ中国の変貌　三四八
中国文学の特質
●その人間学　三五六

●その美しさとはげしさ　三七〇
●『経書』の成立と中国の精神文化　三七九
●中国語のおもしろさ　三九〇

Ⅲ　中国と日本

中国と日本
●日本人の放浪と追放の時代　三九七
●日中文学者の〈うしろめたさ〉の違い　四〇四
●ひとりごと―日中合体論　四一三
湘江、ゆったり流れ　四二
あとがき　四二七

I　中国で考えたこと


内蒙古自
カラホト
フフホト
オルドス河套
北京
燕
五台山
河北省
山西省
晋
太原
寧夏回族自治区
甘
武威
蘭州
西寧
陝
関中
西安
隴
天水
漢中
河南省
豫
開封
洛陽
嵩山
安徽省
皖
合肥
蘇
呉
江
南京
上海
四川省
成都
峨眉山
蜀
重慶
荆
湖北省
宜昌
鄂
武昌
越
浙江省
杭州
湖南省
湘
長沙
洞庭湖
鄱陽湖
贛
江西省
南昌
貴州省
貴陽
黔
福建省
福州
閩
厦門
台湾
台北
桂林
桂
広西僮族自治区
広東省
広州
粵
珠江
ホンコン
ヴェトナム
交趾
上川島
0
200

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十六年目の中国

昭和三十六年、かつて腐敗した中国兵の屍を埋めた南昌の飛行場にはジェット機が勢ぞろいし、黄河の水は青くなり、女性は東京の女より女らしく、そして街並は静かで雑音の少ない街となっていた。

●菊の花、河、大地

十一月（昭和三十六年）の十八日から、十二月の十四日まで、二十五日間の冬の旅であった。

寒い北京に着いた夜も、暑い広州から帰る朝も、花束をもらった。そのせいか、新中国は予想以上に花の多い国であったように思う。温室で育てられたカーネーションの類は、上海のホテル以外では見かけなかったが、公園にも、街路にも赤い花や白い花が見うけられた。さし出された花束も、どちらかといえば、露地咲きの、野生的な花々がたばねられてあった。鶏頭の赤い花冠なども、動物の舌が裂けて垂れさがったように、ゆたかに房をなしていた。

香港から汽車で約一時間、深圳（しんせん）の関所をパスしたころは、冬服の私は、外套をぬいでも、汗みずくだった。そのため、広州文化公園の菊花展覧会に案内された夜は、涼しくて気持がよかった。

一鉢に七百の花をつけた、大株の菊は「大刀」と呼ばれる。それだけたくさんの花を、ささえているのだから、大刀にちがいなかった。

「二匹ノ竜ガ珠ヲ争ウ」かたちに、しつらえられた菊人形は、石の柱の向こう側と、こっち側に、背骨をくねらせた二つの花の怪獣が、見事にうずくまっている。菊のカエル、アヒル、コイもあった。

日本から行くと、夜の街は、どこでも電灯がくらい。展覧会場の灯火も、きらびやかではない。まぶしくもない。雨あがりの月曜で、人出は少ない方だという。うすくらがりを、子供づれの中年男が、しずかに説明しながら、花をたのしんでいる。種類は九百を越し、全国から集められた菊だ。上海産の「黒牡丹」は、小さな、小さな花にすぎないが、黒みがかった紅色は、たしかに珍しかった。菊のほかに、書法（道）の展覧場もあって、おとなしい男女が、ゆっくりと回り歩いて行く。

おだやかで、おとなしい。しずかで、イライラしていない。これは、南と北を飛行機で早まわりして、最後にのこった強い印象である。

曲芸、業余劇団（シロウト芝居）、漫才などの見物もできて、入場料は十五円（日本金）ぐらいらしい。男二人の会話で、お客を笑わせる漫才は、日本と全く同じ話しくちだった。女ばかりの広洲エッ劇の、女優さんの顔の化粧は、びっくりするほど紅かった。

ローラー・スケート場には、青少年があそびたわむれていた。

広州を飛び立ってから、北京、洛陽、西安、重慶、上海、杭州と、付きっきりで世話してくれたの

は、詩人の李季さん、通訳の周さんである。李季さんは、この春、文学代表団の一人として、来日している。謝冰心女史と二人で、うちを訪問してくれたとき、食堂で、すべってころんだりした。小柄で精悍愉快な河南男だ。

東京で会ったときは、蘭州に住む田舎者と錯覚していたが、どうしてどうして、万事によく気がつく、やり手だった。十五歳で八路軍に入り、十九歳で書いた詩集が、今では百万部を突破しているという、あちらでの人気者だった。

あちらの文学者は、とにかく、よくしゃべり、よく食べる。こちらの食べ方や、しゃべり方が少ないと、すぐ心配する。西安と上海で、一日ずつ発熱で寝こんだ私などは、ひどく李さんに心配をかけたものだ。心臓を痛めていて、旅疲れを気づかわれた椎名さんより、私の方が厄介者だったわけだ。

「少しでも太って、目方をふやして帰ってくれないと、奥さんにしかられるから」

李季さんばかりでなく、各地の接待員から、こういわれた。これは、おもしろい冗談であるばかりでなく、ほんとうにその点に注意している様子だった。

「うわあ、こんなに優遇される資格は、ぼくにはないんだがなあ」

暖房のよくきいた民族飯店の大きな部屋、列車の特等席、飛行場の食堂、崑明池や西湖の遊覧船で、私は、恥ずかしいような、うれしいような、とまどった気持だった。昭和十二年に、輜重兵一等兵として、呉淞（ウースン）に「敵前上陸」して、上海、杭州、南京、武漢、南昌を、侵略者として移動した過去があるのだから、恐縮、申しわけない、照れくさいと感ぜずにはいられなかった。そのころ、衛生材

料廠に勤務していた私は、消毒液をみたした噴霧器を肩にして、南昌の飛行場に行き、腐敗した中国兵の屍を埋めたものだった。そこには今、ジェット機が勇ましく勢ぞろいしていた。また、こんど、三潭印月、花巷観魚など、西湖の美しいながめを見物させてもらいながらも、かって、慰問袋の氷砂糖やタバコを役げあたえた、戦地の少年や幼児の血色のわるい顔を想い出さずにいられなかった。

昭和十九年から、二十年にかけ、堀田善衛さんと私は上海にいた。

人力車、三輪車、電車、バス、自家用の高級自動車がぶつかりあい、わめきあって、そうぞうしかった南京路も、今は整然として、しずかだった。戦争末期、陰気で、さびしげな空気をよどませていたハードン花園は、とりはらわれ、ソ連と中国の友誼をむすぶ、新式でロシアふうの記念館が立っていた。

そこで、新朝鮮の写真の並べられた会場の窓から、外をのぞいて、

「ほら、あそこが君のいた所だぜ」

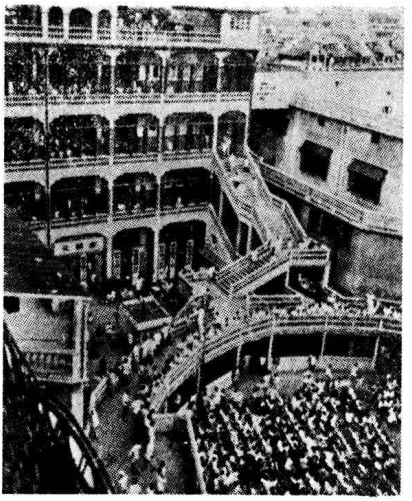
と、目の速い堀田氏が指さした。

なるほど、北欧の気船会社の社長が、金にあかして建てた五階建築の尖塔が、人家の屋根の上にながめられた。予定ではなかったが、そこへ車をまわしてもらった。フェアリイ・ランドと呼ばれた、その奇怪な家の、毒々しい赤と緑の色どりは、いくらか色あせていた。だが、庭の芝生も、競馬ウマの銅像も、もとのままだった。この家の三階で、私はかつて、愛国的な中国民衆には、あまり歓迎されそうにない日本の書物を、中国語に翻訳する仕事をしていたのだった。今その門には、共産主義青

年同盟の表札がさげられてあった。私は、恥も外聞もなく、芝生の上にあぐらをかいた。上海の責任者であり、東京でも対談した巴金さんに、怪しまれても、かまわないと思った。失礼なわがままだと知りながら、そうせずにいられなかった。

「すべては過ぎ去った。しかし、すべては存在しつづけている」

ズウズウしい、鈍い感覚ではあるが、つらいような、甘ったれたようなドウニデモナレという無神経さと一しょに、何ものかに見ぬかれている、うそ寒さが私を襲った。



上海の娯楽センター「大世界」

郊外の農村、馬橋で、人民公社を視察したのち、閔行(びんこう)のホテルで中食をとった。野菜の栽培で成功している公社では、小川にかかった橋をわたり、ひろい耕地の緑の作物のあいだを歩いた。川のほとりでは、川底からすくいあげた黒い泥を、肥料としてかためていた。脱穀機のモーターがうなり、傍に寄って、稲の穂をにぎって見たりした。新造の三階の農家もあった。農民はやはり、三階に入るのは好まないという話だった。左官の上手な人は、その仕事が専門だそうで、レンガを積んで物置をこしらえていた。人口四万八千もある大きな公社なので、そよ風に吹かれながら、ほんの一部を見て回ったにすぎない。雑草をけずり取るための農具には、

竹の柄の先に扇がたの刃がついていた。持って見ると、日光であたたまって、軽かった。同行した上海在住の批評家は「私も農村に半年ほど入ったが、畑仕事はへたで、まちがって電線を切ったりして、農村に迷惑かけました」と、語った。池のそばの細路に捨てられてあった藻草を「これは何ですか」ときくと、豚の飼料にしますと答えた。

閔行は、急速に発展した町らしく、機械工場の立ち並ぶはずれに、たくさんの新式の住宅や劇場などが増築されつつあった。労働者住宅にしろ、小学校にしろ、空地が多いので建設は急テンポですすむらしかった。巴金さんも、私と同様、セキをしていたのに、元気でまめまめしく付きそってくれた。

閔行からの帰途、西郊公園（もとのゼスフィールド公園）の前までくると、発熱した私は寒気のためふるえ出した。昭和二十年の夏、私はその近くに住んでいた。因果応報のような気がした。

魯迅の墓の前では、赤いスカーフを首に巻いた、ピオニールの少年が演説したり、詩を朗読したりしていた。中村光夫さんと二人で、花輪をささげたが、すさまじい少年たちの勢いに押されて、きまりがわるかった。

北京の飛行場に、有名な老舎さんが出迎えてくださったのは、恐縮のかぎりだった。国家から乗用車をあたえられた、谷崎さんクラスの老文豪が、痛む脚をひきずって、寒風に吹かれながら、おくれた飛行機を待ちうけていてくれたのだから。

北京で、もう一つ驚いたのは、団長の堀田さんの国際人としての顔のひろさであった。インドやロ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com